



Title	アメリカ、カナダにおける沖縄研究の歴史と課題
Author(s)	仲地, 清
Citation	沖縄文化研究, 20: 309-335
Issue Date	1993-12-11
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/8401
Rights	法政大学沖縄文化研究所

アメリカ、カナダにおける沖縄研究の歴史と課題

仲 地 清

一、エール大学

一九八七年、国際琉球研究学会（代表世話人・平恒次イリノイ大学教授）の発足を契機に沖縄研究を国際的視野で研究する機運が高まっている。今日までの和文、漢文中心の沖縄研究から欧文の資料と海外の研究者の理論を活用することで沖縄研究を単に地域の学問から広く世界の学問に広げること、も国際琉球研究学会の目的の一つである。私は国際琉球研究学会の一員として学会の主旨に賛同する立場から「カナダ・アメリカにおける沖縄研究の歴史と課題」のテーマで、研究する機会があった。以下は一九九十年二月から五月にかけて、沖縄県人材育成財団の国外研究員としてアメリカ、カナダ

で調査した報告である。

欧文琉球文献に関する先駆的な研究者はエール大学東アジア言語文学科主任講師の山口栄鉄さんで、彼の一連の著「琉球、異国典籍と資料」（一九七七年版）、「異国と琉球」（一九八六年版）に主要文献が紹介されている。恵まれたエール大学の古文書館に埋もれた琉球文献を研究者の手引きとして紹介した今までの功績は大きい。これら一連の著は今後の欧文の琉球文献調査の道案内書である。

この道案内書を基にエール大学に眠る琉球文献書に目を通すと、一番古い文献はブラージュ・ダンボルケの「ダンボルケルク伝」（ポルトガル語、一七五五年出版）で、その中に「ゴレースの島はレキオ」と記録され「レキオ人」らしき人がマラッカまで貿易に來たことが記録されている。この本は一五一一年にマラッカを植民地に征服したダンボルケルクについて、息子が後日、書いた伝記である。レキオ人が果して琉球人であったかが、研究の焦点である。

十六世紀初頭から琉球を訪れた文献の中で一番の功績はイギリス人、バジル・ホール大佐の著わした「朝鮮西部沿岸及び大琉球島航海探検記」（一八一八年版）で、その初版はエール大学に残る。ホールは一八一六年、ライアラ号で來琉し、琉球に六週間滞在した。その時の模様を記録した琉球紀行の章に琉球の生活風景、社会状況、植物が記載されている。また同行したクリフォードは琉球言語を採取した。この探検記は一八一八年にロンドンで出版され、引き続きオランダ、ドイツ、イタリア、アメリカでも翻訳出版され、当時紀行文学の名著として賞賛を受けた。

「武器のない大琉球」のバジルの表現はフランスのナポレオン公をはじめヨーロッパ諸国の王を驚かし、この本に触発されて琉球に向かった西洋人は多かった。

これまでもたびたび紹介されている本で、カマドウ・ペリー提督の「日本遠征記」（一八六五年版）と「ペリー提督自筆日誌、一八五二年―一八五四年」（一九六八年版）と米国政府海軍省編の「米国海軍日本遠征関係公文書、一八五四―一八五五年」（一八五六年出版）がある。随行員の通事サムエル・ウィリアムズ博士がペリー提督から琉球国総理大臣、尚宏勲にあてた「琉球王国への接見」の漢文翻訳書の古文書もある。

波の上のガンチョーのニックネームで、沖縄に最初にキリスト教を伝道したベッテルハイム師の一連の著もスターリング記念図書館に納められていた。「ベッテルハイム書簡―前期三年の琉球伝道報告」（一八五十年版）「ピーター・パーカー師宛ベッテルハイム書簡」（一八五三年版）「琉球伝道一八五一―一八五二年度報告」（一八五三年版）ベッテルハイム師訳「路加伝福音書」（一八五二年版）などである。

琉球言語研究の古典名著、バジル・ホール・チェンバレンの「日琉語比較文典語彙」（一八八五年版）も保管され同著は、日琉語対訳文例、琉球歌劇一篇、語彙千三百余語が含まれている。チェンバレンは「大琉球航海探検記」を著わしたバジル・ホールの孫にあたり、バジル一家が琉球研究に果たした功績は計りしれない。

宮古、八重山関係でエドワード・ベルシャー船長が著わした「サンセン号航海記」(一八四八年版)があげられる。ベルシャー船長は一八四三年の暮れから一八四五年六月にかけて八重山諸島に六週間、宮古諸島に二週間滞在し先島諸島の風俗、習慣、政治形態、信仰、罰則などを記録した。

これ以外にも貴重な欧文文献がエール大学に眠っているはずである。エール大学に勤める山口講師が地の利を生かして、時折り紹介しているもののまだまだすべてに行き届かない。加えて、米軍が沖縄占領開始以前のエール大学文化人類学部の琉球研究文献、琉球史の記録のある中国語文献も残っている。

エール大学は欧文琉球文献研究の宝庫である。

二、ハワイ大学

ハワイ大学は次の四つの点でアメリカにおける沖縄研究のメッカである。①米軍が太平洋戦争時の沖縄上陸作戦前、沖縄統治準備の沖縄研究はハワイで行われた。②米国民政府の米国留学生の大多数はハワイ大学で学んだ。よって留学生の修士、博士論文が数多くある。③琉球史の第一級資料のフラック・ホーレイ文庫がハワイ大にある。④沖縄をテーマに博士論文を仕上げ、沖縄関係の講座を担当する研究者がいる。⑤沖縄からの初期移民の移住地で、ハワイ大学に移民関係の資料、出版がある。

⑥ハワイ大学出版局から沖縄関係の本が出版されている。

アメリカ軍は沖繩上陸直前にハワイに住む沖繩出身者を対象に文化人類学の見地から琉球人を研究して来たる占領政策に備えた。その著「琉球諸島の沖繩人―日本の少数集団」(陸軍省、一九四四年版)は「琉球人は大和人と違う」と結論している。

ハーバード大学人類学教授のアルフレッド・トッザー博士が中心になって研究した「シビル・アフエアーズ・ハンドブック」もハワイで執筆された。同著はアメリカ軍の占領手引書で学問内容の評価はむつかしいが、兵隊が沖繩を知る手段になりえた。

沖繩研究をアメリカに広げたという点で特筆されることは、米国占領下の米留学生制度である。この制度は、親米知識人の育成という批判もあるが、留学生がアメリカの大学で沖繩関係の論文を仕上げ、それが、特にアメリカに沖繩研究を広げる大きな役割になった点は評価してよい。

一九四五年から一九七二年までにハワイ大学で学んだ留学生から三つの博士論文と二十七の修士論文が提出された。博士論文は松田貢氏(ハワイ大学卒業後、琉球大学で講師をしていたが病気で亡くなった)の「琉球王国の政府、一六〇九年―一八六一年」(歴史学、一九六一年)、崎原貢氏(ハワイ大学準教授)の「徳川時代における薩摩藩の財政の中の琉球の重要性」(歴史学、一九七一年)、山里清氏(琉大教授)の「珊瑚礁の研究」(生物学、一九六六年)の三つである。

二十八の修士論文の内訳は文化系で歴史学三、音楽学二、地理学一、言語学一、社会福祉学一がある。自然科学系で化学五、土壌学四、動物学三、放射能学三、植物学二、微生物学二がある。

復帰後の自費留学生、比嘉悦子さん（民族音楽研究家）は一九七六年、「琉球の古典音楽Ⅱ言葉の表現の分析」で、大谷きよ子さんは一九八一年に「玉城朝薫の研究Ⅱ二重敵打」で、音楽学の修士論文を仕上げた。

また東西センターに勤める大城清子さんは一九八十年に「ツーリスにおける日本語」で教育学博士論文、新里るみ子さん（ピッツバーク大講師）は一九八四年に「沖縄方言の研究」で言語学博士論文をまとめた。

次に特筆すべき点は、すでに多くの人々が紹介したようにハワイ大学にはフランク・ホーレイ文庫がある。イギリス人のジャーナリストが、戦前、収集した琉球関係の文献をハワイ大学が購入してホーレイ特別文庫を設置した。歴史学部の阪巻駿三博士の御尽力とハワイ沖縄県人会の協力で京都からハワイに移った。琉球歴史研究の一級の資料で、沖縄県の財政で沖縄にこそ保管すべき財産である。

ハワイ大学では県出身の崎原貢準教授が、「日本史」と「沖縄史」を教える。崎原教授はハワイに住む条件を生かし、自ら移民研究をするかたわら、移民研究のアドバイザーである。ハワイ大学と沖縄県人会が一九八二年に出版した「ウチンナンチュウ」は英語で書かれた学術書である。仲宗根宗温さんは「沖縄の踊り」講座を担当する。かつては文化人類学のウィリアム・レブラ教授が沖縄カルチャーの講座を担当していたが、数年前に亡くなり講座はとだえてしまった。

レブラ教授には一九五十年にハーヴァード大学で八重山の島々の宗教をまとめた、「琉球の宗教」

の博士論文がある。この論文は「琉球の宗教」の題で、一九五八年にハワイ大学が出版した。同じ文化人類学の分野で、ハワイ大学教授のトーマス・マレンズキー教授は東村平良部落を研究した「平良・沖繩村」を一九六三年にハワイ大学から出版した。

言語学では「首里方言の研究」でコーネル大学から一九七三年に博士号を取得したデビッド・アシュワード準教授、「諸屯―前近代史の北部琉球方言の研究」で一九八四年にエール大学で博士号を取得したレオン・シェラフィン助教授がいる。

ハワイ大学東アジア図書館の松井正人館長はホーレイ文庫に詳しく、これまで東京の本邦書籍と協力してホーレイ文庫の一部を復刻する大きな仕事を仕上げた。県出身の仲村淳さんは専門司書として東洋研究に便宜を計ってくれる。

ハワイ大学出版局から琉球関係の本が数多く出版されている。すでに述べた本の他、リチャード・ピアソン教授（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学）の「琉球列島の考古学」（一九六九年）、阪巻駿三博士の「琉球書誌稿」（一九六三年）、「琉球人名地名辞典」（一九六四年）など重要な文献がある。

このような裏付けから、ハワイ大はアメリカでの沖縄研究の発生地である。

三、ホーレイ文庫

研究者間ではよく知れ渡っている琉球研究の第一級文献「ホーレイ文庫」はハワイ大学図書館東洋部の三階にある。

戦前、琉球関係の文献を収集したフランク・ホーレイはイギリス人で一九三十年ごろ、ロンドン・タイムズ東京支社社長として日本へ渡った。京都、山階に三十年住み、一九六一年に亡くなった。妻は島袋久子で、沖縄出身者らしい姓だが定かでない。

ハワイ大学歴史部の阪巻駿三博士、比嘉春潮氏、仲原善忠氏らの働きで、ホーレイ死後の一九六一年、琉球文献は海を渡った。戦前、沖縄にあった琉球史料は戦火で焼け出されたので、ハワイ大学の「ホーレイ文庫」が唯一、頼みの文献となった。ホーレイ文庫所蔵の文献は日本語文献七六五件、韓国および中国語文献四十四件、欧州語文献五十五件、計八百六十四件。

ホーレイ文庫のハワイ行きの大事業を成功に導いた阪巻教授は一九二九年から一九三一年まで京都の同志社大学で英語講師をしたことがあり、その時期にホーレイ氏と接触したと思われる。阪巻教授は一九〇六年にハワイで生まれ、ハワイ大学学士号（一九二七年）、ハワイ大修士号（一九二八年）、コロンビア大学博士号（一九三九年）の経歴を持ち、一九三九年から一九七三年までハワイ大学で勤めた。政治学と東洋史の研究者だった。

ホーレイ文庫がハワイ大学に着くと、ハワイ大学は琉球研究の権威者、比嘉春潮、仲原善忠氏を東西文化、技術交流センター（現東西センター）の客員教授で招聘し、文庫の整理研究を依頼した。その後、中世琉球交流史の権威者、京大の小葉田淳教授も招待された。日本人研究者に加わり、協力したのが、当時ハワイ東西文化センターの所員だった文化人類学者のウィリアム・レブラ博士とトーマス・スズキ博士だった。

研究スタッフの分類研究の成果は阪巻駿三編「琉球文物叢科」（一九六五年）でまとめられた。その後、松井正人、黒川智佳、宋美名子共編、崎原貢解説で「琉球、注釈文献」（一九八一年）改訂版が出た。これらの目録を読めばホーレイ文庫の蔵書がわかる。

本の重要性については、それぞれの専門分野で見方が異なるので、ここでは古い順に十冊を列举して、一部を紹介しよう。

陳侃「使琉球録」（一五三四年）、南浦文之「南浦文集」（一六二五年）、琉球人登城行列（一六三〇年）、杜三策、胡靖「杜天使使冊封琉球真記奇観」（一六三三年）、袋中「琉球神道記」（一六四八年）、新井白石「琉球国事略」（一七一一年）、新井白石「琉球国来聘使」（一七一〇年）、程順則「雪堂燕游草」（一七一四年）。

また珍しい本で沖繩に初めてキリスト教を伝道したバーナード・ベッテルハイム牧師の「約翰伝福音書聖差言行伝」（一八八五年、香港出版）がある。琉球方言で訳された唯一の聖書である。

ハワイ大学は一九八十年に宝玲叢刊編纂委員会（代表、ロバート・境教授）を設置し、沖縄関係資料の復刻版を出版した。今まで出版したのは「琉球教育」全十四卷（一九八十年）、「琉球所屬問題関係資料」全八卷（一九八十年）、写真集「望郷・沖縄」全五卷（一九八一年）、「江戸期琉球物資料集覧」全四卷（一九八一年）、「琉球風俗絵図」全二卷（一九八一年）である。

これまでの復刻版は東京の本邦書籍が引き受けていたが、鈴木治雄社長の死で、続刊が不確かになってしまった。学問の公開性、元々、沖縄の財産だったことから、沖縄県教育庁が出版権を取って復刻するのがベストの策である。

四、米軍統治下の沖縄研究

沖縄研究が海外へ発展するきっかけになったのは一九四五年まで続いた米軍の沖縄統治も寄与した。米軍は沖縄上陸直前にすでに沖縄研究に着手し、一九四三年にコロンビア大学の軍政府と行政に関する研究学部は「南西諸島」を発行した。すでにハワイの項で扱ったように陸軍省は一九四四年「琉球諸島の沖縄人―日本の少数派」を、海軍省は「シビル・アフエーズ・ハンドブック」を、まとめた。これはエール大学文化人類学部のジョージ・ムラドク博士が中心になっている。これらの資料はエール大学に残っている。

米軍は占領政策を進めるにあたり、次々と資料作成を行った。「サマテーション・オブ・U S ミリ

タリーガーバメント・アクティビティ・イン・リュウキュウアイランド」「琉球シビルアフェアーズ・アクティビティ」「琉球アイランドファクトブック」などである。一九五七年に発行された米民政府のプロパガンダ誌であった。「今日の琉球」「守礼の光」も月刊誌、週刊誌がなかったころ、県内の研究者の発表の場として重宝がられた。

戦後でもない一九五一年から五二年にかけて沖縄統治の資料作りを目的とした琉球諸島学術研究のプロジェクトがワシントンの連邦学術研究委員会太平洋科学研究所によって組織され、文化人類学者らが参加した。ダクラス・ハリングは奄美大島を、クラレンス・グラケンが沖縄本島、ウィリアム・バードが宮古島を、アレン・スミスが八重山島を担当した。グラッケンは南部の具志頭村破名城と北部の宜野座村松田を調査した。

引き続き、太平洋科学研究所は「戦後の沖縄の調査」のプロジェクトを一九五三年九月から一九五四年六月にわたって実施した。フォーレスト・ピッツが東風平村友寄、越来村、ウィリアム・レーブラが兼城村兼城、上本部村北里、ウエイン・サットルズが知念村山里、恩納村山田の地理、土地利用、保健、教育等を詳細に総括的に調査した。

後日、このうち幾人かは沖縄研究の専門家として育っていった。レブラは一九五八年にハーバード大学に「琉球の宗教」の博士論文を提出した。その後、ハワイ東西文化センターの研究員、ハワイ大学の教授へ進み、沖縄文化の講座も担当していたが、一九八六年に亡くなった。一九六八年に「沖縄

の宗教と社会構造」を著わした。またグラッケンは「偉大な琉球、沖縄村落の研究」を一九五五年に出版した。

ハーリングはシラキューズ大学文化人類学の教授になり、沖縄資料文庫の開設に夢をかけていたが志半ばに亡くなった。

一九六一年にホノルルで琉球研究をテーマにした太平洋学術会議が開かれ、その時の発表者の大半は琉球諸島学術研究プロジェクトのメンバーで、発表の内容はワシントン大学のアレン・スミス教授の編集で「琉球文化と社会の研究」で、一九六一年、ハワイ大学から出版された。また同じ調査メンバーが中心になって沖縄をテーマにしたアジア研究学会が一九六三年三月二十五日に、那覇市文化センターで開かれている。

次に論及すべき仕事は一連のジョージ・カー氏の沖縄歴史の研究である。戦争前から東洋史に造詣の深かったカーは、一九五二年、当時の米民政官ジェームス・ルイス准将の要請で琉球史研究に着手した。その最初の業績は一九五三年にスタンフォード大で研究した「琉球、一九四五年前の王国と地方」で、太平洋科学研究部からタイプ印刷でまとめられている。後日、「琉球の歴史」のタイトルで琉球民政府から出版されて県民にもなじみ深い。

カーはこのタイプ印刷本をさらに詳細に研究した「沖縄、島の歴史」（東京・タトルブック出版、一九五八年）の業績がある。この本は体系的、客観的な点から英語で綴られた最高の琉球の歴史の評

価を受けている。ハワイに移り、ホノルル芸術協会に勤めながら比嘉春潮、久手堅憲次氏の協力で作った琉球文献は一九六十年に琉球大学から出版された。同著には二千二百の日本語文献が英訳付きで掲載されている。これまでの多大な功績に対して沖縄タイムスから表彰を受けた。

さらに忘れてならないのは一九六二年に七月から一九六四年二月まで民政官であつた地理学者のシャノン・マキューン博士である。キャラウェイ高等弁務官の下で働いたが、折り合いが悪く退任した。その後、フロリダ大学に移り、沖縄地理研究に尽くした。

マキューン博士は沖縄に住む地理学者と一緒に「琉球列島プロジェクト、研究と分析」の研究誌を一九七十年から一九七三年にかけて続けた。また著書「琉球島」(一九七五年版)は沖縄の地理、歴史、政治、文化、社会について要点を盛り込んだ沖縄学の入門書である。

沖縄戦の体験、琉球民政府勤務を通して沖縄研究に興味を寄せた人々は他にもいる。キング・ノーマン准将は「琉球諸島・文献集」を一九六七年に陸軍省から出した。ロバート・フラストは「沖縄冒険」(一九五八年)、ジェームス・ロビンソンは「沖縄・人々と彼らの神」(一九六九年)、ジェイムス・アウブリッジは「沖縄、太平洋のパウシ」(一九七二年)を出版した。

このように軍政府の存在は海外における沖縄研究に直接的、間接的な影響をあたえたといえる。

五、米留學生の役割

米国の二十七年間の沖繩統治のおかげで米民政府の奨学金を受けて米国の大学で学んだ学生は多い。これらの学生達は沖繩関係の博士論文、修士論文を大学に提出し、アメリカにおける沖繩研究の糸口を作った。これらの論文はアメリカと沖繩の知的財産になった。

一九四九年からスタートして一九七二年に終わった米留學生制度による留學生数は千百一人で、そのうち博士号が二十八人、修士号が二百六十二人、学士号が百五十五人誕生した。

まず最初に沖繩関係をテーマにした博士論文を紹介しよう。ハワイ大学歴史学部に松田貢氏が「琉球王国の政府 一六〇九年—一八七二年」を一九六七年に提出した。松田氏には一九六二年に同じハワイ大学で仕上げた修士論文「イギリスと琉球一六〇〇年—一八七九年。日本国に併合される以前のイギリスの琉球王国、琉球人との関係」がある。ハワイ大学の東洋史を引き継ぐであろうと周辺から囑望されていたが病気で亡くなった。生前の大きな仕事は京都大学の小葉田淳教授と共著で出した「歴代宝案」の英語版がある。この本は英語による琉球史の基本文献として高い評価を受けている。これは崎原貢准教授が以前から提唱している英語による琉球基本文献のバイオニアといえよう。生前、松田氏が使用した資料は琉球大学の図書館に松田文庫として設置されている。

同じく歴史学専攻で、ハワイ大学准教授の崎原貢氏は一九七一年、ハワイ大に「徳川時代における

薩摩藩財源の中の琉球の重要性」を著した。崎原准教授はハワイに残り、移民史研究にも枠を広げている。新しい著には「簡略沖縄史―おもろさうしを基に」（一九八七年）がある。琉球大学の照屋善彦教授は「バーナード・ベッテルハイムと沖縄。沖縄の最初のプロテスタント牧師の研究、一八四六年―一八五四年」を一九六九年に、コロラド大学で書いた。

経済学の分野ではカリフォルニア大学の伊志嶺朝好教授が「日本の関税と沖縄の砂糖産業」を一九七一年にウイスコンシン大学に、新潟県の国際大学の嘉数啓教授は「沖縄の歳入と歳出のシステム分析」で一九七一年にネブラスカ大学から博士号をそれぞれ取得した。

ロード・アイランド大学の比嘉美佐子教授は「一九四五年以前、以後の琉球列島の家族の住宅」のユニークな論文を一九七三年、ミネソタ大学に提出した。

自然科学の分野ではすでにハワイ大学の項で記したように琉大の山里清教授の「珊瑚礁の研究」（一九六六年）がある。

これらの博士論文は沖縄が米軍占領下に置かれていたという状況の中で、米留学生制度を利用してアメリカに渡り、アメリカの学会に沖縄関係の論文を永久に残した。これらの論文が米国における沖縄研究の広がり礎をつくった。

一方、沖縄を題材にしなかったけれども、別のテーマで博士論文を残した方々もいる。ワシントン州立大学の赤嶺利夫教授は「高校生の内申書とワシントン州立大学での学力テストの関係」のテーマ

で、一九五九年にワシントン州立大学から教育学博士号を取得した。これは沖縄からの米留學生の最初の博士号だった。同じくワシントン州立大学に教育学博士論文を提出した元琉大校長の東江康治氏は「〇×式テストとそのエラーのモデル」を一九七二年に仕上げた。その時の指導教官はすでに琉大からワシントン大学に移っていた赤嶺利夫教授で、米留学の先輩、後輩が協力したよい例である。

東江学長の弟で琉大教授の東江平之氏は一九六一年にエール大学から「意味に関する言語文脈の効果」の研究で教育心理学の博士号を取得している。

政治学の分野では元琉大教授で、新潟国際大学教授の宮里政玄氏が「南アジアの中立主義に対するアメリカ外交一九四七年から一九五五年」の博士論文を一九六一年オハイオ州立大に、同じく元琉大教授の比嘉幹郎氏は「現代日本の政治における行政官僚の役割」の博士論文を一九六八年カリフォルニア大に提出した。

経済学の分野ではピッツバーグ大学教授の真栄城朝敏氏が「Kクラス基準による展望の比較」を一九六五年、ミシガン大学で仕上げた。イリノイ大学の平恒次教授は「日本の賃金差の変化、一八八一年から一九五八年」を一九六一年、スタンフォード大学に提出した。これを基にした著書「日本経済発展と労働市場」が一九七一年、コロンビア大学から出版され、ハーバード大学大学院のニューコメン賞に輝いた。

英文学の分野では琉大教授の米須興文氏が「イエイツの研究」で一九六八年にミシガン州立大から、

瀬名波栄輝教授が「ワーズワースの研究」で一九七二年、ミズーリ大学から博士号を取得した。

教育社会学では放送大学の比嘉正範教授が「口語学習における同似性に関する六つのベースの経験的比較」で一九六二年に、ハーバード大学の博士号を取得した。石川清治琉大教授は「学校図書館に対する先生の態度。先生の性格に一致させた図書館のサービスの調査」で、一九七二年、ジョージ・ピーポリー教員大学の博士号を取得した。

復帰以前に、米留学生制度の下で修士号を取り、復帰後、博士課程へ進み博士論文を仕上げた人もいる。琉球大学の伊志嶺恵徹教授はコーネル大学から一九七四年に「アメリカと日本の違憲立法審査権の比較研究」で法学博士を、元琉大教授で、亡くなった友寄英一郎氏はシラキューズ大学から一九七四年に「歴史を理解する為の地理的環境および考古学の要因―琉球の場合」で社会科学博士号を取得した。

これらの博士論文は米国の図書館に保管されているが、沖縄の研究者、読者が広く利用しやすいように日本語への翻訳、または出版が望ましい。

六、シラキューズ大学琉球研究図書室

ニューヨーク州の北方、シラキューズ大学の人類学者ダクラス・ハリング教授は生前、ハワイ大学の琉球研究文庫「阪巻コレクション」と対比して、シラキューズ大学に「琉球研究図書室」を設立

して、東部の琉球研究のメッカにしようと尽力した方である。

ダグラス教授と沖繩の結びつきは一九五一年九月から一九五二年三月にかけてワシントンDCの連邦學術委員会とハワイの太平洋科学委員会の依頼を受けて奄美大島を調査研究したことがきっかけだった。その調査報告で「琉球列島の民政府職員が日本語を使って行政することは緊急を要し、日本語の訓練をしなければならない。琉球の歴史、文化も理解する必要がある。行政官は現地の文化の理解度を含めて採用すべきである」の改革案を出した。

沖繩研究にたずさわった多くの米国人と同様に、ハーリング教授も沖繩研究に特別の関心を示し始めた。沖繩から帰国後、シラキューズ大学図書館に琉球研究図書室を作ること計畫した。この事業に協力したのは哲学者のジョン・デュイだった。デュイ夫妻はアジア研究、アジアからの留学生に心と援助を差しのべた。デュイ夫妻が設立した「ジョン・デュイ財団」が沖繩関係図書の購入の援助を担った。

一九六八年に元琉球民政府職員のノーマン・キング准将の琉球関係の蔵書を購入し、図書室を豊富にした。キング氏は陸軍省が出版した「琉球諸島・文献」の著者である。

高等弁務官の元諮問委員のレオン・ウォルターも協力者の一人だった。ウォルターは沖繩の子供達向けの物語に興味を持ち、沖繩から本を贈った。現地沖繩の協力者には比嘉春潮、比嘉寿助、宮城常豊、仲原善忠、島尾敏雄氏らが名を連ねている。

このような形で、シラキューズ大学が集めた蔵書についての目録は「琉球研究コレクションのカタログ」で、一九六九年にまとめられた。またハーリング教授自身には「沖繩の習慣、昨日そして今日」（一九六九年）の著書がある。専門書として「社会科学における事実と理解」（一九六四年）もある。

ここでハーリング教授のバックグラウンドを付け加えておこう。一八九四年、ニューヨーク州生まれで、コルゲート大学を卒業した後、コロンビア大学で社会科学の修士号を修め宣教師として日本へ渡った。日本滞在中に関東大震災を体験し、そのことをニューヨーク州バッファロー市の新聞「バッファローニュース」に連載した。そのシリーズは後にコロンビア大学から「神と地震の国」で出た。けれども、ハーリング氏は属していた教会のドクトリンと合わないということで、一九二七年教会から破門を受けた。

日本帰国後、コロンビア大学で非常勤講師を勤めていたが、シラキューズ大学市民と行政の訓練学部採用されて移った。一九三十年代の大恐慌時代は研究員も日の当たる場所がなく、特に文化人類学の仕事は少なかった。しかしながら、日本と太平洋戦争が近づくにつれて、日本通の学者が重要視され、彼の講演は大衆の人気を得るようになった。彼はハーバード大学に設けられた陸軍省の民間行政専門学校の教授になって、占領地へ赴く将校達の訓練にあたった。戦後、再びシラキューズ大学に戻った。

晩年、コルゲート大学から科学博士、シラキューズ大学から法学博士の名誉称号を受けた。

元民政官で地理学者のシャノン・マキューン博士はダグラス教授の教え子にあたり、人と人とのつながりが沖縄研究を豊かにしていったことを物語っている。ハリング教授のシラキューズ大学を東部の琉球研究のメッカにする目論みは、ハリング教授の亡き後、中だるみになったが、後続の研究者が出ること期待したい。

七、外国人による沖縄関係博士論文

一九五二年から一九八二年までにアメリカ人によって書かれた沖縄関係博士論文は二十二題ある。

内訳は政治学関係が九論文で米軍政府、復帰運動、米―琉球関係等が取り扱われている。次に多いのは文化人類学の三論文、言語学の三論文、教育学の三論文、歴史学の二論文、音楽学の一論文である。

それぞれの博士論文の著書、題、大学名、提出年月日は次の通りである。政治学関係ではフレッドリック・ステイレスは「琉球、アメリカの附随関係。軍事、民事行政の分析、一九四五年―一九五八年」をジョージタウンに一九六十年。コーヘン・アブラハムは「沖縄の文化、教育に対するアメリカ統治の影響」をコロンビア大学に一九六一年。ハーバード・アレクサンダーは「合衆国と沖縄の附随関係」をニューヨーク市立大学に一九七二年。ピネンジイキ・ジョハネスは「沖縄返還のダイナミックス、政治過程のケーススタディ」をタフツ大学に一九七二年。ウォルター・アンドルー・ダンサー

ブは「米外交政策と沖縄の日本復帰」をジョージ・ワシントン大学に一九七三年。フレッドリック・シエールズは「沖縄におけるアメリカの経験、外交政策と政策決定のケース」をコーネル大学に一九七七年。シーゲル・アルバートは「沖縄に対するアメリカ外交、一九四五年―一九七二年。政策決定過程における組織の反応」をウェスト・バージニア大学に一九七八年。リチャード・アーティンは「第二次大戦の日本―アメリカ関係における沖縄の役割」をジョージア大学に一九八二年。

文化人類学の分野では次の三論文。ネイラー・ハリーは「二十八人の琉球人学生の心理的文化的研究」をニューメキシコ大学に一九五二年。ジェームス・ティグナーは「ラテンアメリカの沖縄人」をスタンフォード大学に一九五六年。田中まさ子は「沖縄の村における親戚と外戚」をロッチェスター大学に一九七四年。

言語学では次の二論文。オーウェン・ロブレスは「沖縄の方言。シンクロニック分析」をミシガン大学に一九六三年。シュフォース・デュビットは「首里方言の研究」をコーネル大に一九七三年。

教育学は次の三論文。ホーラー・キングは「琉球大学とミシガン州立大学間の教育、行政、文化の影響」をミシガン州立大学に一九七三年。

歴史学では次の三論文。チェン・タートワンは「中国―琉球の関係」をインディアナ大学に一九六三年。リオン・パク・ワアは「中国と日本の不明確な戦争。琉球諸島をめぐる紛争、一九七一年―一九八一年」をカリフォルニア大学に一九七八年。

音楽学ではラール・アドリアンは「沖縄古典音楽―分析と比較研究」をハーバード大に一九五二年。戦後の早い時期からいろいろな分野に渡ってアメリカの研究者が沖縄研究に取り組んだ事は明らかである。アメリカ軍の沖縄統治という政治環境が多くの人々のアメリカ人に沖縄の政治研究への興味を注いだことは理解できる。しかし、言語学、音楽、人類学の分野まで広がっていることは驚きである。

これらの論文を沖縄県立図書館が収集保管、または翻訳出版することの重要性は問わずと明らかである。

八、米軍基地内の沖縄研究

長年、米軍基地撤去運動が続けている沖縄県にとって米軍基地が沖縄研究に寄与していることは想像しがたい。基地の中にあるメリーランド大学、オクラホマ州立大学、セントラルテキスト大学、レイマン大学などが直接的間接的に沖縄研究と結びついている。メリーランド大学は正規な沖縄の歴史、文化の講座を開いている。

沖縄の嘉手納基地内にメリーランドアジア分校が開校したのは一九五六年だった。その当時、日本本土、韓国、沖縄の分校を加えて千七百人の学生が受講した。一九五七年に新たに台湾とグアム分校が加わり、全体で五千七百人の受講生が膨れあがった。

一九六八年には沖縄と本土でカウンセリングとパーソネルサービス、キャンプ座間で行政学の修士

課程を開講したが受講生が続かずに、現在は沖縄だけにカウンセリングとパーソネルサービスの修士課程が残っている。

現在、アジア分校はさらに拡大し、香港、ミッドウェイ、オーストラリア、フィリピンが加わり、沖縄校が一番学生数が多い。

沖縄校には沖縄関係の講座があり、それが学生達が沖縄研究に興味を抱いた一つのきっかけであった。三年前に亡くなった文化人類学者のバーバラ・ゴルドン教授は「琉球諸島の生活と文化」の講座を長年、担当した。ゴルドン教授は一九六〇年ころ来沖し、琉球大学で東洋史を学び、筑波大学で文化人類学の博士号を修めた。宮古の多良間島の研究者だった。また、琉球民政府の元教育部長のゴードン・ワーナー教授は復帰後も沖縄に住み、「沖縄戦」「沖縄の武道」を教えている。

基地内を研究題にした博士論文も残っている。ジョン・チューアンは「沖縄のアメリカ軍軍属の学校に就学する六才から七才の児童の研究―文化と皮膚の色が混ざった児童と混ざらない児童の比較」を一九七五年、ミシガン州立大学に、チャールズ・マトラーは「沖縄の嘉手納基地の教育予算―一年を通しての教育スケジュール」を一九七八年、南カリフォルニア大学に、ハードルド・クリフォードは「沖縄の国防省所属の学校の歴史、一九四六年―一九七八年」を一九七八年、オレゴン州立大学にそれぞれ博士論文を提出した。

マーシャ・クローマーは「二重文化および二重言語の学生の研究」を一九八四年、南カリフォルニ

ア大学に、スーザン・オーシエルは「沖縄の軍隊に所属する親の移動、人間関係、学校に対する反応」を一九八四年、ミシガン州立大学に、カシエリン・ワーガーは「米軍所属の学校の生徒の他国人に対する認識、態度、知識、趣味の測定」を一九八六年、ミシガン州立大学でそれぞれ仕上げた。

一九八六年から沖縄県と軍の特別協定によって沖縄の学生が基地内の大学で学べるようになり、その結果、日本人学生とアメリカ人学生の接触が拡大されることが予想されるので、アメリカ人の沖縄への関心は増えることが期待される。

また亡くなったゴールデン博士の生前の業績を記念して沖縄研究の学生を増やす目的でゴールデン奨学金がメリーランド大学に設置された。これも沖縄研究を発展させるきっかけになりそうだ。

九、国際琉球研究学会と新しい研究者

沖縄研究の海外での広がりには、アメリカ・イリノイ大学の平恒次教授とエール大学の山口栄鉄講師の陣頭で、アメリカを中心とした沖縄研究者を組織した国際琉球研究学会の発足で一段と広がりをみせた。一九八八年、米国アジア研究学会のサンフランシスコ年次大会に、沖縄研究者が集まり、学会の発足を確認した。

趣意書は「米国におけるアジア研究は年々隆盛に向かう一方であるが、琉球研究ばかりは、沖縄の日本復帰以後、年々衰退の一途をたどっている。琉球研究で業績のある学者も琉球以外の課題や地域

に関心を移している。ここでの「琉球」とは、下野敏見の「大和文化と琉球文化」（一九八六年）におけるような「琉球文化」（圏と範囲を同じくする地域の略称と考えて戴きたい。文化地理的には種子島から与那国にいたる弧状列島の謂であり、政治的には本琉球Ⅱ沖縄本島を中心に展開してきた政治社会を指すものとする。米国における琉球研究の長期的振興のためには、米国全土のウチナーンチュ学者及び全ての琉球研究者を持つ必要がある。本会の差し当りの事業は、米国学会における琉球関係の研究報告を奨励することである」とする。

現在のメンバーは北米アメリカの研究者を中心におよそ百人。学際組織であるので研究者の領域は多岐に広がる。メンバーにはアメリカ、カナダの学会の重鎮がいるので心強い。発起人の平教授はもとより、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学のリチャード・ピアソン教授（考古学）、カリフォルニア大学のロバート・ガーフィン教授（全米民族音楽学会会長）、フロリダ大学教授で元民政官のシャノン・マキューン教授（地理学）、ハワイ大の崎原貢准教授（歴史学）などがある。

沖縄研究の広がりに向けて、平教授がパネルのリーダーとなって、いままで数回の沖縄研究の発表会を開いた。一九八九年、ワシントンDCでの第四十一回米国アジア研究学会の琉球研究部会では、ブリティッシュ・コロンビア大学のリチャード・ピアソン教授が議長となって、「琉球王朝における固有の組織」のテーマで、八研究者が発表した。ピアソン教授自身は「千百年から千五百年代ー琉球における国家組織の出現」、オハイオ州立大学のレオン・セラフィン助教授は「十六世紀の沖縄

方言の多様―地方、大陸および日本の形跡」、ハワイ大学の崎原貢准教授は「おもろで見る琉球史」、ニューヨーク大の伊藤さちよ講師は「琉球舞踊の起源」、スミソニアン研究所のルイス・コート研究員は「文化的接触および貿易関係の変化が反映した陶器生産のパターン」、法政大学沖縄文化研究所のアマダ・スティンチエカム研究員は「十七―十九世紀、人頭税制度下における織物生産の保護」カリフォルニア大のロバート・ガーフィン教授は「沖縄工工四表示法と首里王朝音楽の伝統普及に果たしたその役割」をそれぞれ発表した。

沖縄出身者ハワイ移住者ハワイ移住九十周年を迎えた一九九十年、ハワイで崎原貢ハワイ大准教授が議長になって「琉球文化学会」が開かれ、六人が発表した。イリノイ大学の平恒次教授は「先史、中世、および現在の琉球研究における人口移動」、法政大学の比嘉実助教授は「おもろさうしを通して見た古代琉球文化」、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学のリチャード・ピアソン教授の「考古学と中山王国の起源」、法政大学沖縄文化研究所のアマンダ・スティンチエカム研究員の「琉球社会における織物の役割」、琉球大学の照屋善彦教授の「欧米における十九世紀琉球のイメージと十九世紀初期のアメリカの平和運動への琉球影響」、ハワイ大学のレオン・セラフィン教授の「沖縄語を通して見た沖縄文化」が紹介された。

その他、カナダで開かれた第三十三回アジア、北アフリカ研究学会で平恒次教授が議長となって「近世以後の琉球」のテーマで四人が発表した。このように国際学会で沖縄研究を発表することに

よって、国際的に沖縄研究が徐々に広がりつつある。

最後に、沖縄研究の国際化に向けた課題をあげて、小論を閉じたい。

①国際琉球研究学会を充実、発展させてきた北アメリカ中心の研究者のネットワークをヨーロッパ、オーストラリア、南アメリカを含めた論に広げる。②琉球研究の基本文献を欧文へ翻訳して外国人研究者へ便宜を計る。特に琉球史料、復帰運動資料の翻訳は重要である。③沖縄県出身者、アメリカ人が書いた沖縄関係の博士、修士論文を琉大図書館、県立図書館で収集、翻訳、出版する。④米国留学生の博士、修士論文の目録を作る。⑤ハワイ大ホーレイ文庫、エール大、ハーバード大に保管されている和文、漢文、欧文の琉球関係文献の復刻、翻訳、出版、目録作りを沖縄県のプロジェクトとして遂行する。